

平成28年度研究成果サマリー

本研究所では、その年度に終了する研究課題の成果等をまとめた、研究課題ごとの「研究成果報告書」を刊行し、ウェブサイト上で公開しています。また、研究成果をよりわかりやすく普及していくため、研究成果報告書の内容を要約し、一冊にまとめた「研究成果報告書サマリー集」を刊行しています。

ここでは、「研究成果報告書サマリー集（平成28年度終了課題）」の中から、各研究課題の成果の「要旨」、「キーワード」を抜粋し、掲載しています。

なお、平成28年度に終了する研究課題の「研究成果報告書」は平成29年8月、「研究成果報告書サマリー集」は平成29年6月の刊行を予定しています。

【基幹研究】

知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程編成の在り方 ーアクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・方法・学習評価の一体化ー

研究代表者： 明官 茂

研究概要はこちら→ <http://www.nise.go.jp/cms/8,11540,18,106.html>

【要旨】

本研究は、学習指導要領が大きく変わる時期に合わせて知的障害教育においても新しい時代に必要となる育成を目指す資質・能力の考え方にに基づき、教育課程編成をどう考えていけばよいか、それを実現するための指導方法として重要であると提言されたアクティブ・ラーニングの実践を検証することで、特別支援教育の更なる発展の一助になるべく研究として立ち上げた。

本研究は、研究1「知的障害教育における「育成を目指す資質・能力」についての具体的検討」、研究2「研究協力機関の実践に基づく知的障害教育分野でのアクティブ・ラーニングの検討」、研究3「知的障害教育における教育目標と内容・指導方法、学習評価が一体的につながりを持つための工夫の検討」の大きく3つに分けられる。研究1に関しては、育成を目指す資質・能力の知的障害教育における具体像を検証するために、OECDのキー・コンピテンシー等の考え方を、研究協力機関で作成している単元系統表を使って分析したところ、特別支援学校（知的障害）でも汎用的能力の指導をすでに行っていることがわかった。このことから、新しい時代に必要な資質・能力は、知的障害教育でも発達の実態を考慮すれば同じように考えていくことが可能であるとの方向性を確認できた。研究2及び3に関しては、5つの研究協力機関に2年間にわたってアクティブ・ラーニングの視点で実践に取り組んでもらい、知的障害教育に必要な授業づくりの特徴を見いだすことができた。このことから、学校が「育てたい力」の共通理解を進め、目標、内容・指導方法、学習評価を、授業研究を中心にして組織的にカリキュラム・マネジメントに取り組むことが重要であることが理解できた。

【キーワード】 知的障害， 育成を目指す資質・能力， 学習評価， アクティブ・ラーニング， カリキュラム・マネジメント

〔基幹研究〕

**「ことばの教室」がインクルーシブ教育システム構築に果たす役割に関する実際的研究
－言語障害教育の専門性の活用－**

研究代表者： 牧野 泰美（平成27年度） 小林 倫代（平成28年度）

研究概要はこちら→ <http://www.nise.go.jp/cms/8,10298,18,106.html>

【要旨】

ことばの教室（言語障害通級指導教室及び言語障害特別支援学級）担当教員の約半数は、ことばの教室経験が3年以下の教員である。本研究では、①言語指導等の専門性の維持・向上・継承をどのように図っていくのか、その方策を明らかにする、②ことばの教室が地域においてインクルーシブ教育システム構築にどのような役割を果たせるのか、について言語障害教育の専門性の活用の観点も含めて検討・整理することを目的とし、文献研究、アンケート調査、意見交換会、実地調査等による資料の収集と分析を行った。その結果、専門性の維持・向上に向け研修会を実施する際には、参加者が主体的に学べるように工夫をしていることや、啓発冊子や事例集等の作成により専門性を高める工夫を行っていることが明らかになった。また、ことばの教室の活動では、在籍学級との連携や校内の支援に関する委員会に係わっていること等が明らかになり、インクルーシブ教育システム構築の中で地域においては子どもの発達やことばに関わる専門家として特別支援教育の視点を有する教員としての役割を担っていることが示された。

【キーワード】 言語障害教育， ことばの教室， 専門性の維持・向上， 校内支援， 地域支援